

## 瀬戸内海における浜辺の自然・文化・歴史教室(2)

九州大学応用力学研究所

教授 柳 哲 雄

(社)瀬戸内海環境保全協会が福武財団から助成金を得た「瀬戸内海における浜辺の自然・文化・歴史教室」が、2006年10月14日(土)、20名の親子の参加のもと、岡山県瀬戸内市牛窓町にある「岡山大学理学部臨海実験所」で行われた。



◀満潮時



▶干潮時

臨海実験所前の海岸の様子



今回の教室は2006年7月17日(海の日)に高松・屋島で行われた教室(柳, 2006)に続く2回目のものである。

参加者は午前9:00に岡山駅前に集合し、貸し切りバスで牛窓に向かった。10:00に臨海実験所に到着した後、岡山大学理学部白井浩子助教授に採取の際の注意を受けた後、実験所前のタイド・プールで1時間半の間カニ・エビ・ヤドカリなどの海岸小動物の採取を行った。暫くの間、海岸には小動物を採取する親子の歓声がこだました。11:30に実験所に帰って、採取した、ヒザラガイ・カメノテ・カシパン・クモヒトデ・クロイソカイメン・アメフラシ・イトマキヒトデなど、白井助教授による同定と、そ

### ●略歴



1948年 山口県生まれ(やなぎ てつお)  
1972年 京都大学理学部卒業  
1974年 京都大学大学院理学研究科地球物理学専攻修了  
1974年 愛媛大学工学部海洋工学科助手、講師、助教授、教授を経て  
1998年 現職

それぞれの種の行動特性に関する簡単な説明があり、参加者の興味を引いた。



昼食後の13：00～14：10、白井助教授の指導のもと、採取したクロムシの卵の顕微鏡観察を行い、ヒトデの発生の様子を示すスライド画像を見た後、クラゲ・ヒトデ・ウニ・ナマコはいずれも口から肛門へのつながり方が似ていて親戚であるということを知り、みんな驚いた。さらに、白井助教授は「エビ・タコ・ナマコの挙動特性を見事に言い表した、牛窓の漁民文化を象徴する民話」を紹介された。



14：20～15：30は岡山大学文学部倉地克直教授から「朝鮮通信使」の話があった。江戸時代、10年～30年ごとに瀬戸内海を船で往復した朝鮮通信使は、牛窓港を正式な宿泊所としていたので、地元の歓迎の様子は今でも秋祭りとして保存されていること、

通信使の船団は通信使・護衛・接待・見物の船をすべて含めると、総勢1500隻程度、ある海域を通過するには4時間以上を要し、地元の人々は船団の見学のための船を仕立てたり、無人島に行き、宴会をしながら見物を楽しんだ、という興味深いエピソードが紹介された。

15：40、教室を終えて帰りのバスに乗る前に、のんびりと海上を滑るヨットが数隻浮かぶ牛窓の海を眺めていると、タイド・プールで動き回る海岸小動物の向こうに、海岸で漁獲したエビ・タコ・ナマコを扱う漁民、沖合を航行する1000隻を越える朝鮮通信使一行の船団が、目に見えてくるような気がしてきて、自然・文化・歴史を同時に学ぶことの豊かさを実感できた。

参加者は16：30に、事故もなく無事、岡山駅前解散した。

今回で、「瀬戸内海における浜辺の自然・文化・歴史教室」は終了したが、今後も機会を得て、同様な教室を瀬戸内海で開催していく必要がある。ただ、この2回の教室を通じて、小学生に歴史を教えることの難しさを痛感した。屋島でも牛窓でも、数人の小学生は歴史の話に退屈がり、外に出てしまった。今後は小学生に対する歴史の教え方を工夫しなければいけない。

#### 参考文献

柳 哲雄（2006）：瀬戸内海浜辺の自然・文化・歴史教室。瀬戸内海，47，45-46。